編集後記

日本予防医学リスクマネージメント学会　理事長　酒井亮二

2007 年 5 月 21 日

日本予防医学リスクマネージメント学会の機関誌「安全医学」の刊行は 3 年間にわたりました。

今回、「安全医学」第 3 巻 2 号(通巻 6 号)が編集委員会の強力な活動により刊行にいたりました。特集では、「アスベスト問題から得る教訓」という、環境健康リスクマネージメントに関する分野です。元々リスクマネージメントは米国議会と行政府にて環境政策・環境対策の科学として 1980 年代に始まり、米国国立環境リスクマネージメントセンターやハーバード大学リスク分析センターが設立され、限りある資源の有効利用を合理的に解明しようとしたものです。今回の特集を企画いただいた刈間理介編集長は、東大病院救急部、東大医学部衛生学教室を経て、東大環境安全研究センターに勤務され、最近では大学の危機管理委員会の主要メンバーとして医学サイドから様々な貢献をされています。

さて、特集の企画を説明した刈間編集長の概論「化学物質利用に立脚した現代社会における展望」では、アスベストに対する日本社会での問題点を詳細に整理いただき、これは合理的なリスクマネージメントが日本社会で大変遅れてきたこと、およびその重要性を明快に警鐘いただきました。

大久保靖司筋先生(東京大学保健センター)の論文「石綿問題からの教訓―産業医からの立場」は、産業医の立場から石綿問題について詳細に論文で、リスク情報の正確な収集、リスクアセスメントおよびリスクコミュニケーションの失敗、がんにおける長期的なリスク評価の重要性を指摘しています。数世代に及ぼすリスクの防止は地球環境問題を含めて重要で、また、経済グローバル化社会では全世界的視点でのリスクマネージメントが不可欠と考えます。

中野孝司先生(兵庫医科大学胸部腫瘍学)の臨床医の立場からの論文「低濃度アスベスト暴露のリスク対策」では、石綿は低濃度で強力な発がん性があるため、石綿作業者だけでなく、住民に対する今後のフォローがリスクマネージメントとして重要であることを、大変精密な医学的根拠を掲げて指摘されました。どのような新しい制度が必要かを早急に検討する必要があります。

大槻剛己先生(川崎医科大学衛生学)らの論文「アスベストの生体影響」は、最近の国内外の様々な会議の動向と著者らの研究を整理し、アスベストの健康影響は単に発がんだけでなく、免疫系にも解明が及んでいることを示されました。1 つの化学物質は通常様々な人体リスクを伴うので、アスベストの健康リスクについては更なる医学研究が必要です。

以上のアスベストに関する特集は、アスベストのリスクマネージメントでの問題点を詳細に整理されました。すでにアスベストについては多数の特集があるため、この企画の話をはじめて聞いたとき、既存のものと重複するのではないかと考えました。しかし、以上の論文は、化学物質のリスクマネージメントという観点で多くの新しい問題点を指摘されました。化学物質のリスクマネージメントという視点から安全と安心を考える上で、大変貴重かつ斬新な特集であり、編集長と著者の先生に感謝申し上げます。

本巻号では、伊藤謙治先生(東京工業大学)の「医療安全における安全文化」の後編、および医療安全の評価を含む原著論文 2 編が掲載されています。「人は聞き話すことによって豊かになり、読むことによって想像的になり、書くによって正確になる」という欧州の格言は、学会活動と教育の基本と考えます。今回も、リスクマネージメントに関する大変貴重な教材を提供いただき、ありがとうございました。なお、次号の特集は医療でのコミュニケーションとのことです。